連載

太田哲也の フェラーリ ニッポン ストラダーレ

第11回 クライスジークでマフラー談義。

［TEZZO F 360ストラダーレ製作プロジェクト］

著者プロフィール **隠岐麻里奈**
サッカーなどを中心にしたスポーツドキュメントを得意とするスポーツライター。ほかに、一般誌で著名インタビューなどの連載ももつ。

太田哲也がフェラーリに帰還するということは当時関係していた人々へと再会することを意味する。毎回ドラマチックな展開が続く中、この横浜のファクトリーでもひとつの再会が果たされていた。ファクトリーの名は『クライスジーク』。

隠岐麻里奈●文 text by Marina Oki
宮門秀行●写真 photographs by Hideyuki Miyakado
クライスジーク／テッツォ●協力 cooperation by Kreissieg/TEZZO☎03-5465-2553
＊テッツォ・ウエブサイト　HP＝http://www.tezzo.jp/

クライスジーク横浜のファクトリーで、実際の作業現場や車両を見ながら対話を重ねる井上と太田。今後ここからどんなマフラーが仕上がるか、楽しみである。なおふたりの対話は取材終了後も延々と続いた……ようだ。

　その日、私はクライスジークの受付で、同社社長である井上勝巳を待っていた。しばらくすると、フェラーリの合間をぬって、向こうからひとりの男性がやってきた。ヘルスエンジェルスのように、黒い革ジャンにダメージ加工のジーパン、指輪や時計などアクセサリーだけでなく、腰からもシルバーのチェーンが下がっており、見るからにハードな印象だ。

　そこへ太田が遅れてやってきた。そのまま黒い革ジャンの男性の方に歩を進め、「久しぶりです」と声をかけた。そして、ふたりはがっちり握手。彼は太田を見て「顔はぜんぜん普通だね」と言って、強面の表情を崩して笑顔をみせた。

「井上さんも元気そう」と太田。

　えっ、この人が?!

　そう、彼がクライスジーク代表の井上勝巳だったのである。どうやら太田と井上は、旧知の仲のようだ。

「あのときは、お世話になりました」と太田は懐かしそうに言った。

　あのとき、とは——。

　1993年、ロンドンから届いた1枚のFAXが太田哲也とフェラーリの出会いだったことは、この連載初回で書いた。ル・マン24時間レースにフェラーリ348LMで出場するため、太田は渡欧。それまで6シーズンに渡って出場したF3000や、マツダ・ワークスなど所属チームがバブル崩壊の余波を受けて軒並みレースから撤退し、太田はル・マンのフェラーリに再起を賭けていた。そのスポンサーを引き受けたのが、井上の会社「マルカツ」（当時）だったのだ。「応援してくれる人がいる幸福をしみじみと感じた」と太田は後に語っている。

　ちなみに、348LMに貼ったステッカーにまつわるエピソードがある。本誌姉妹誌であり太田を密着取材して彼の再起に協力していた「Tipo」山崎編集長（当時）が、「フェラーリに貼るステッカーは、カタカナはちょっと……」と井上にお願いして、「マルカツ」は「MARUKATSU」と表記されたのである。

　太田はこうしてル・マンにて日本人ではじめてフェラーリのステアリングを握り、その後は、ご存知のようにどっぷりとフェラーリの世界の住人になるわけで、井上はいわば、その最初の第一歩に関わった人物だったのである。ふたりの握手は、15年ぶりの「再会」を意味するものだった。

　なぜ、太田は井上に会いに行くことになったのだろうか。そのキッカケは、前号でお伝えしたもてぎでのサーキット走行の際に、ばったり会ったクライスジークのスタッフ、東本との雑談にあった。太田は、ピンときていた。

「東本さんの顔を見て、井上さんのことを思い出したんだよね」。

　1993年当時、井上は日本でスーパートラップというマフラーを輸入していた。太田がル・マンに出たとき、偶然にも348LMに同じブランドのマフラーが装着されていた。太田はその偶然の一致に当時なにか縁を感じたとともに「井上さんってマフラーに興味があるんだな」と思ったことを覚えていた。そして今、井上が実際に手がけるクライスジークのマフラーだが、「音重視」と揶揄されることも時にはある。だが、見方を変えればほしい音を出すためには、単に出口をいじるだけでは難しい。

「フェラーリのエキゾースト系を研究しつくしていないと、いい音は出せない。だったら、それを性能にも活かせるはず」と太田は考えたのだ。

　太田がピンときた井上とは、一体、どんな人物なのだろうかと私も知りたくなった。

　井上勝巳は、大阪で生まれ育った。中学に入る頃には「駅とかでしゃがみこんでる」絵に描いたような悪ガキに成長。中1でカブに乗り、14歳では5000円で買ったMT車を運転していた逸話は、時効になるだろうか……。

「大阪の箕面市だったんですけどね、悪ガキは夜、山へ上がってワインディングを走るものだったんですよ」と懐かしそうに振り返る。

　井上は、エンジンの音がとにかく好きだった。いまでも運転するとき、CDやカーオーディオを聞かないのは、その頃からの習慣だ。好きがこうじて塗装も修理も何でも自分でやっていた。「いま思えば、なかなか見上げた少年でしたね（笑）。木の椅子を使って当時流行ったコンペハンドルを造ったり、マフラーの底に穴をあけたり、ロアアームをひもでくくったりして、金がなかったので、なんでも造っていました。好きで触っているうちに自分でできるようになっちゃいました」。

　転機が訪れたのはハタチのとき。実家の仕事を手伝いながら板金塗装をしていた頃のこと。サーファーの友人にくっついて、ヤンキー井上青年は渡米する。帰国後、アメリカで知り合った人物とクルマのショップをはじめた。それが、「マルカツ」である。いまから20年前の話だ。

　その10年後にはフェラーリの修理も請け負うファクトリーを始め、数年前に「マルカツ」をドイツ語読みさせた「クライスジーク」というブランド名をオリジナルマフラーにつけた。

　井上は、誰かに物造りを教わった経験がない。そのぶん、型にはまることもなかった。例えば、イベントに出展するため、マフラーやエンジンを想像し得ないクルマに積もうと提案する。やっては失敗し、成功するまでやってみる。その繰り返しで井上の無理難題な発想を形にしていく社員たちにも技術力がついていった。

　では、なぜ井上はマフラーにのめり込んでいったのだろうか。

「お客さんが喜んでくれたから」。

　なぜ、フェラーリだったのだろうか。

「フェラーリのお客さんが、とくにマフラーを喜んでくれたから」。

　それは、中古車ショップ時代には味わったことのない喜びだった。

「クルマ屋は客から嫌われることがあるけど、マフラー造りは感謝されるからうれしかった」。

　井上はマフラー製作に生き甲斐を感じるようになり、とことん突きつめるようになった。

「フェラーリらしい音が出たってお客さんが喜んでくれると、こっちももっとやろうと思えてくる。僕は商売人というより職人肌。他の人より時間をかけるからいいマフラーができるだけです。毎日考えるのが楽しいんですよね。マフラー造っては捨てて、また造る。趣味みたいなもんです」。

　こうして人やモノの縁がつながり、TEZZOとクライスジークのコラボレートが実現することとなった。いったい、どんなマフラーができあがるのだろう。その井上は、最初から感触を得ていた。

「いい話だなとパッと思いましたよ。太田さんはプロ中のプロ。その太田さんが考えるマフラー、おもしろいじゃないですか。太田さんのノウハウは、これまで僕らがやってきたこととは角度が違うと思うし」。

　太田も考えていた。

「音をあれだけ追求しているなら、それを性能にも振れる技術があるはず」。

　そして、最後にこうつけ加えた。

「捨てたマフラーの本数は裏切らないはずだから」。

　その後、ふたりはTEZZOのマフラーについて構想をはじめた。夜が更けるまで話は尽きることがなかった。この再会がどんな広がりをみせるのか、TEZZOの新たな展開に私はワクワクしていた。

（文中敬称略）

Information

Kreissieg
www.kreissieg.com

クライスジーク横浜
●所在地＝〒224-0044神奈川県横浜市都筑区川向町999-1
☎045-476-1000
●HP＝http://www.kreissieg.com/